

中国における最近の考古学的成果と今後の古代史展望

米 田 賢 次 郎

第二次大戦後、今日までの中国の考古学的発掘の成果は正に驚くべきもので、中国研究者のみならず、屢々一般の人々も驚異の目をみはらせてきた。一寸念頭に浮ぶだけでも、日本でも展観され、その規模の荘大さに感嘆させられた、西安東郊臨潼県の秦の始皇帝の兵馬俑坑（その後同陵墓の別の坑から青銅の車馬器が発見され更に注目されるようになった）、その他殷代初期の二里頭の城壁跡（河南省偃^{やん}師^し県）、殷後期の殷墟五号墓（河南省安陽県）、西周勃興の地と目されている周原遺跡（陝西省岐山）、その三号墓から殆んど生けるが如き状態で被葬者軼侯夫人が発掘された漢代初期の馬王堆（湖南省長沙）、玉片を金糸で綴り合せたいわゆる「金縷玉衣」の遺

は到底数えきれるものではない。これらの発掘の進行状況や成果は多く『考古』・『文物』等の雑誌で、我国に紹介されているのであるが、まさに応接にいとまがないという有様である。とはいふものの、それは全体の極く一部であらうと思われる。

その他殷代初期の二里頭の城壁跡（河南省偃^{やん}師^し県）、殷後期の殷墟五号墓（河南省安陽県）、西周勃興の地と目されている周原遺跡（陝西省岐山）、その三号墓から殆んど生けるが如き状態で被葬者軼侯夫人が発掘された漢代初期の馬王堆（湖南省長沙）、玉片を金糸で綴り合せたいわゆる「金縷玉衣」の遺体の発掘された漢中期の満城漢墓（河北省満城）等々各時代にわたり、前には想像もできなかった遺物が大量に発見された。またそれ程に派手な評判にならなかったが、学問的に上記の遺物に匹肩する遺物も多く、国内の各地の墓地からも発見された戦国・秦漢の木（竹）簡や、江南水田遺跡の発掘成果がそれである。更にそれ程人の耳目にのぼらず、単に専門家の中でのみ学問的に高く評価された種類の発掘物に至って

以上のような成果が報告される度に私が感ずるのは、中国の歴史の古さと古代文化の高さが、我々日本人一般の常識を超えたものであり、恐らく中国人学者でも新しく発見した洞窟の中が異常に深く広く、かつ道が多岐にわかれて茫然としている状況と形容できるのではあるまいか。事実単なる伝説として考えられ、中国人の誇張と考えられていた事で、現在の発掘によって単なる伝説や、誇張でないと思倣されるようになった例も少なくない。

それはさておき、発現した過去の名作品を単に賞玩していることが考古学者・古代史家の目的ではなく、これらの遺跡・遺物から、中国の過去の人々の生活形態、固有の文化の性質、周辺の国土との文化交流の仕方とその結果、換言すれば数千年の間、他国の文化とどのように相互に影響を与えあ

って、今日の東亜の文化圏を築きあげたか、を考えなければ歴史家は単なる好事家にすぎない。しかしこの学問的作業は、多人数の協力、多大の費用と時間、莫大な作業量の消費を前提として結論らしきものに達しうるが、それは、その研究作業に従事した研究者の一致した結論であるとは限らないばかりか、せいぜい大同小異のグループ的結論が若干数できて、互いに競い合う程度のものである。従って私個人の予想などは沙汰の限りであるが、歴史家は単に過去の事を知っていればよい、という時代も過ぎたので、甚だ月並みな見解にすぎないが、あえて編集氏のすすめに従うことにした。以下、(A)新石器時代の多様化、(B)江南新石器文化発現の意義、(C)歴史の黎明期の上昇、(D)秦漢帝国の性格異同の問題、にわけて考えてみたいと思う。

(A)について。戦前の新石器時代については、彩色土器に代表される仰韶文化と、黒陶に代表される龍山文化と、どちらが古いか大きな問題であった。前者は彩色された美麗な土器で主として中原から西方に分布し、後者は前者より高温の火で焼かれ、またロクロ使用の痕跡もあり中原・山東一帯に分布していると考えられていた。でこの論争は中原文化の基底になるものが東方系か西方系かの論争をも伴う議論として重視された。しかし、これは殷墟発掘の際、後岡から、下層から順に彩陶・黒陶・灰陶(殷代の土器)の破片を含む地層が発見されて、一応この地方では彩陶が古いと結論された。

しかし戦後の各地での発掘により、仰韶文化は、最も早く拓けた半坡村遺跡(西安近郊)から大きく二系統にわかれて各地に分布しており、一方の龍山文化もまた、陝西・河南・山東系の三系統にわかれて、広く華北一帯に分布し、あまり東西の区別なしに長期にわたって併存していたと考えられるようになった。ただ上限を尋ねると、仰韶文化の中から龍山文化が生まれだものという説が有力になっているようである。が、それよりも注目すべきは、河北省武安縣磁山村や、河南省新鄭縣裴李崗から、仰韶文化の先駆をなした文化と見られる遺跡の発見されていることである。

(B)について。仰韶文化より古い文化、先行仰韶遺跡の発見よりも遙かに重要と思われるものは、江南における水田住居地帯の発掘であり、特に最も古いと見做されている浙江省余姚県の河姆渡遺跡と、山東の龍山文化に影響を与えていると見られる江南・江淮の青蓮崗文化の発掘である。

前者の遺跡の年代は紀元前五〇〇〇年プラスマイナス一三〇年の間と見られ、その発見された際、当時の住民の稲穀貯蔵所から大量の稲穀、穀穀・稻稗・稻葉が混然として二〇〜二五cmの厚さに堆積しており、相当大規模な水田部落であったことを推測させる。また同処から発掘された多数の農具は、勿論石器・木器・竹器・骨器の類であるが、各々単独の用途をもつ専門性の高い農具で、必ずしも最初に出現する農具の段階の物ではないらしい。また時期的に河姆渡遺跡より若干

おけると見られる、青蓮崗文化ですら華北の古い龍山文化に、影響を与えているというならば、今迄の中国古代史における我々の常識、「黄河文明が四方に拡大してゆく過程が中国古代発展の歴史である」という単純な中国文化一元論は、今後通用するか否か問題となる。今、江南に華北より古い、水田を基盤とした華北と異質な新石器文化が発見されたことは、必然的に漢文化多元論、すくなくとも二元論の抬頭を呼び起すであろう。またそれに伴って、「華北の畑作地よりも古く、紀元前七〇〇〇年頃に始まったといわれる古い水稻栽培の文化を持つ江南地帯が、より恵まれた生産条件下にありながら、何故長い間、華北の畑作文化の下に雌伏させられていたか」という甚だ困難な課題への解答も、いずれ余儀なくされるであろうことは間違いない。

(c)について。殷が歴史の曙といわれているのは、殷墟すなわち盤庚王以後最後の紂王に至るまでの都の地、いわゆる殷墟（河南省安陽県）の地が今世紀始めから発掘され、甲骨文及び墓・住居地・宮殿の遺跡及び副葬品・殉葬品などが発掘されて、史料を基礎とした所謂科学的歴史を組立てられるようになったからである。しかし安陽の地は殷の最後の二五〇年位の間の都であって、歴史の曙は実は殷のたそがれ、でもあったわけである。また伝説としては三皇・五帝・夏殷周三代の順であるから伝説の裾をタシカメルという役割を果していたにすぎなかった。

しかし戦後、二里頭（河南省偃師県）から殷初の宮殿跡らしい壇基が二基発見され（一基は一〇八×一〇〇×二m）、その東方九kmの地から東西一、二〇〇m、南北約一、七〇〇mの版築づくりの城壁が発見された。その城壁の高さは崩れていて不明であるが基底は一八m位という。さらに殷代中期の都城と推定される、河南省鄭州郊外二里崗の地に周囲約七、〇〇〇mのやや不正確な正方形の城壁は基底約三六mといわれ、放射性炭素による年代測定は紀元前一六〇〇前後ということで、殷代中期の城壁と推定されるに至った。これで大体殷の初・中・後期の代表的な都市の大枠や位置が判明したので今後その周辺の細かい発掘によって、殷代文化の主要と上流階級の状況が次第に明らかになると思われる。とすれば歴史の曙を夏まで遡上させうるか否かが興味ある問題として新たに登場する。事実この数年来、新聞紙上でも河南省を中心として夏の都城の候補地が幾つかあげられている。しかし夏を歴史の曙とすることは年代が更にへだたっているだけに、殷の場合に比べてより困難である。『漢書地理志』は昔の中国には一、八〇〇の国があったという。この国とは国家の機能を持った国を意味するのではなく、長老に率いられた氏族的聚落を意味するものであろう。ところで三皇五帝三代から秦の統一までを一、八〇〇国から一国へのコースと考えれば、夏の時代は殷に比較して同じような氏族的聚落がさらに多い筈である。すなわち夏の候補地は殷より更に多くて当然

であるといえる。したがって現在の夏の国都候補地も確定までには余程の議論と時間を必要とするであらう。更には夏の文字を確定することが必要である。董作賓氏は殷墟の文字は文字発生後一五〇〇年位のものというから、夏も文字を持っていた筈である。しかし夏の文字については現在何等の手懸りもない。

ただ当否を無視して私見を云わせていただければ、禹の九河を決したという例の治水の伝説から考えれば、戦国時代の中国人は夏の勢力範囲を東方の山東省と河南省の省境一帯に考えていたのではないかと推測される。いずれにせよ、夏の問題は殷の国都の設定よりはるかに困難で、現在の有力候補地である河南省東部一帯の地域も、夏王朝の発生の地でなく、ある程度夏の版図が拡大した後の都城或はそれに準ずる有力都市であった可能性もあると思われる。

(D)について。最初に戦前における木簡の発掘について一言しておきたい。中国では一九〇〇年のスタインの中央アジア探検以来、各探検に百または二百位の漢晋簡が発見されており、特にスタインが一九〇六―一九〇七年にかけて楼蘭・ニア・敦煌の地方で獲得した漢晋木簡一、〇〇〇点弱について、羅振玉・王国維両氏はその写真版をもとに分類・整理して『流沙墜簡』として公刊した。この書は木簡研究法の基礎をきづいたもので、その後一九三〇―一九三一年にかけて居延地方から約一万の木簡が発掘され、主として勞幹氏により

居延簡釈文とその図版が公刊されたが、その基本的な方法は王国維氏の手法を踏襲したものであった。

戦前の木簡はいずれも塞外の地、漢晋の国境守備隊の大小の屯営地跡から発掘されたもので、内容的にも辺境の軍事情況、屯兵の生活等の資料が多かった。それに對し戦後発見された木(竹)簡は殆んど内地の古墓の調査で発見されたものであり、書籍や遺策類(副葬品目録)が多い。前者の書籍の有名なものとしては、幻の兵書と称せられた『孫臏兵書』の外に、後漢初期の医書も発見され、臨床医学、薬学、針灸の各方面にわたって具体性の高い漢代医学を推察させうるのは、この方面の貴重な史料である。

しかし書籍―それには上記以外に種々なものが出ているがそれよりも、最も戦後の木簡学界に大きな波紋を投げたのは、何といっても湖北省雲夢縣睡虎地の古墓より発見された秦簡一、二三五枚である。この墓は、被葬者が秦の始皇帝三〇年に死んだ酈県治獄の喜という下級官吏の墓であると、被葬者の人物と死亡年代が、はっきりしている珍らしい例である。上記の一、二三五枚はこの墓の遺策であるが、その中には多類の法律書の書写が含まれ、秦律の一斑を推察させる。これらは喜が官吏として生前慣れ親しんでいた法律書の一部分である。

所で始皇帝時代の原史料は全く皆無といってもよい程で、この点からだけでも、この遺策の価値は大変なものである。

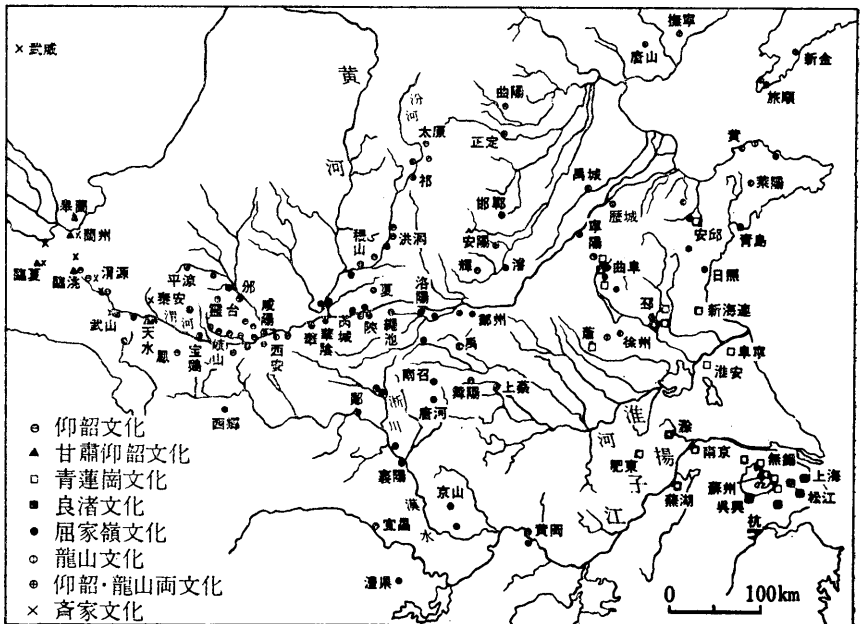
そのため中国・日本の多くの学者が盛んに取扱っており、やがてこの種の史料の増加にもなつて秦の法制・制度があきらかにされてゆくと思われるが、現時点では私にも秦の法文と漢代の法文とは相当に性格が違つていて、秦の法文はむしろ戦国時代的な性格が濃厚であると思われる。考えて見ると、東洋史で一般に秦漢両帝国を一括して類似の帝国と考えて来た理由は(1)漢初の官制の多くは秦の制度を受けついでいる、(2)微賤出身の高祖らにはとても大改革を行う知恵はなかったらうという程度のもので、特に確たる史料の理由があったわけではない。今秦の法律と漢の法律に大きな差が見られるとすれば、秦漢帝国に楔を打込んで、将来秦・漢帝国と書くようになるかも知れない。最近江陵張家山から約一、〇〇〇枚の漢律の木簡が発見された。あるいはこの問題を解くヒントの一部になるかも知れない。

〔参考文献〕

- 曾布川寛 『崑崙山への昇仙』 中公新書
 松丸道雄・永田英正 『中国文明の成立』 講談社
 貝塚茂樹・伊藤道治 『中国の歴史1 原始から春秋戦国』 講談社

- 大庭 脩 『図説 中国の歴史2 秦漢帝国の威容』 講談社
 天野元之助 『中国農業史研究』 増補版 御茶の水書房
 唐代史研究会編 『中国歴史学界の新動向』 刀水書房

(よねだ けんじろう 文学部教授)



新石器遺跡分布図 (原図 貝塚茂樹・伊藤道治著『中国の歴史1』より)